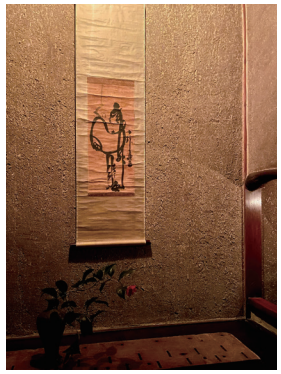
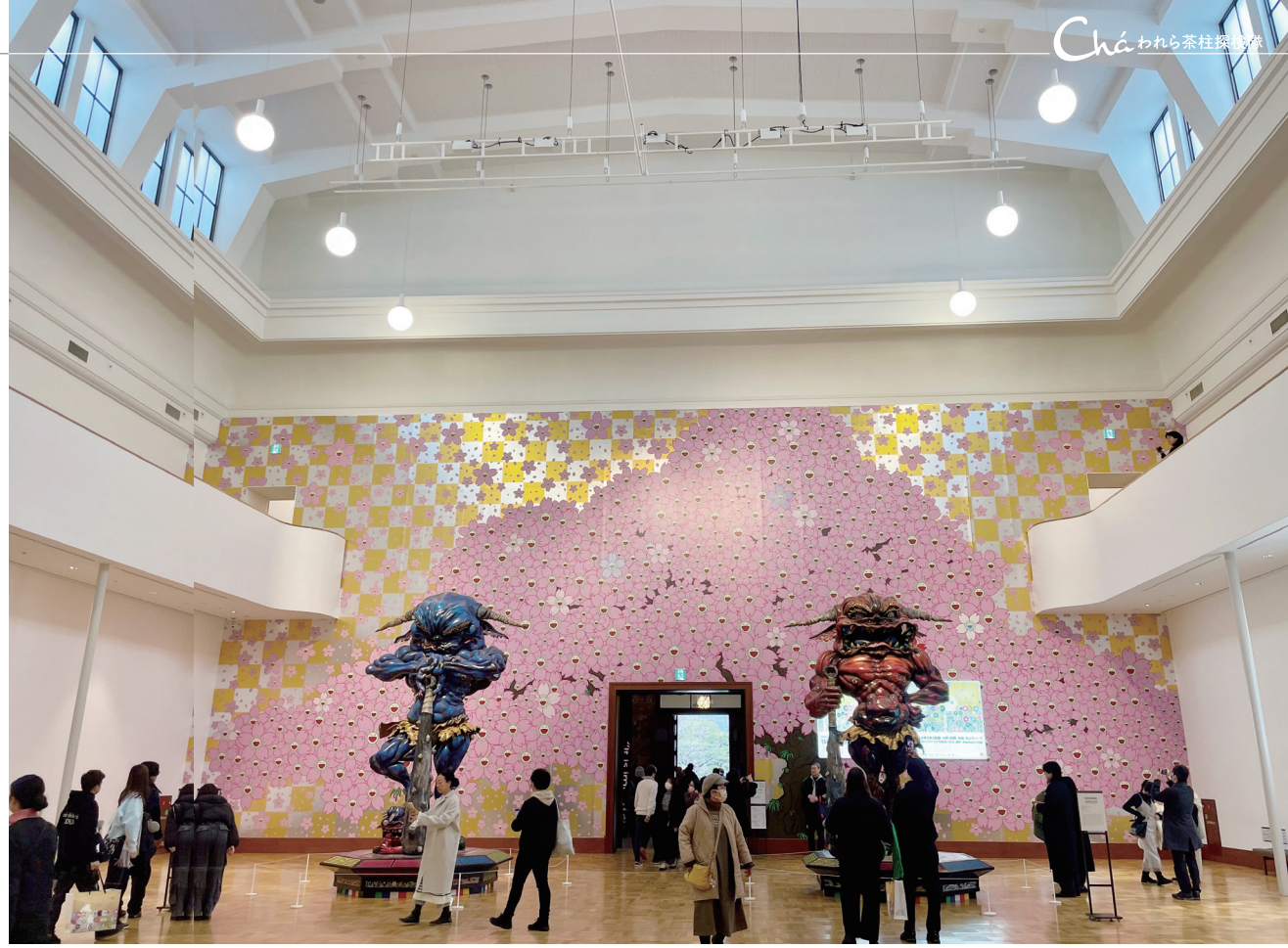
京都を守る四神を東西南北に描き、中央には災厄を知らせる鐘楼の六角堂が建てられた。

スーパーフラットで世界中のアートシーンを揺るがした、村上隆ならではの洛中洛外図。



今回の稽古の軸は道真公。天神様はもののけの神様と言える。

東山を背景に「お花の親子」が金に輝く。ベースにはルイ・ヴィトンの巨大トランクが。



入り口には高さ4.5mの赤の阿像と青の吽像が立ちはだかる。

暮らす旅 京都
もののけの都

文・写真／松岡伸吾（暮らす旅舎）

異界スポット目白押しの京都だが、中でも六道珍皇寺は有名だ。古来よりここは、この世とあの世を結ぶ六道の辻とされてきた。仏教が説く地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人道、天道と六種の冥界が分岐する場所なのだ。平安時代初期に嵯峨天皇に仕えた小野篁（おのたかむら）は、昼は朝廷、夜は閻魔王宮の役人をしていたと伝えられ、本堂裏には篁が冥界へ通う井戸も残っている。また境内の篁堂では大きな閻魔大王坐像と衣冠束帯姿の小野篁像を覗くことができる。

実は平安時代には、この東山の麓一帯は鳥野辺と呼ばれ、遺体を野晒しにする風葬（鳥葬）の場だった。今年のNHK大河ドラマでは藤原道長と紫式部が、鳥野辺で殺された友人らの死体を埋葬するのに、地面を手掘りするトンデモシーンが描かれていた。ドラマには陰陽師で有名な安倍晴明も登場するが、堀川通りの晴明神社や近くの一条戻り橋も魔界スポットとして人気がある。

さて、この春から秋まで、京都市京セラ美術館で開催されているのが「村上隆 もののけ京都」展だ。8年ぶりの個展は160余点ほぼ新作で、京都とその歴史をとらえた立体作品や絵画が展示されている。会場入り口では大きな赤鬼青鬼が出迎え、展示場冒頭で幅12メートルの「洛中洛外図」が観客の目を釘付けにする。江戸初期の岩佐又兵衛の「舟木本」を元に拡大された町並みにはあちこちに物の怪が出没し、髑髏が描かれた金箔の雲が町を覆う。まさに異界京都を俯瞰する作品だ。

作品の圧倒的な存在感は工房スタッフとの協働なしではありえない。この制作手法こそ桃山から江戸初期に活躍した本阿弥光悦に源流がある。書、陶芸、漆芸などを極めた光悦は、幕府から与えられた京都の鷹峯の地に、さまざまな分野の文化人や職人、芸術家たちを集めて作品を制作し、後世に大きな潮流となる琳派を生み出した。

今回の村上隆展は京都市美術館開館90周年を記念して企画された。青龍白虎朱雀玄武の四神から、風神雷神や琳派の紋様、五山の送り火、歌舞伎、舞妓まで、京都の伝統芸術や風物が村上ワールドに結晶した必見の展覧会だ。